

內外新報

第三四號



西垣文庫

文庫 10

7352

8



特 文庫10
7352
8

内外新報第廿四號

慶應四年閏四月廿六日



○仁和寺上書

嘉彰仁和寺相續齡十二の秋ニ造、勅書を甘し出、
得度爾来一點々法燈を挑くと雖も心中ん全く侍居
又海世に長むるは及びおしく文字を勉むと雖も
空しく光陰を送るの之を知らばまゝに、勅旨
遠んとするを踞進を難し慙愧之情日夜止むが
りて去る九日と奉り固く頼り還俗を免するは
く命を蒙り思懼屏言職勢を就と雖もも齡僅か
弱



冠と過ぎ方空匱位と懸懐を去る方今 皇國
改權一以 朝廷は為是不備予哉一日之期會突に万
世不拔之業を不空如何と存するは至極 皇國今日
之形勢に在りし事外國人來港より上り記す今是を
挽回するの道は西洋各國に政体事情を知るに在り
中間に在り親する者ありと雖ども在りし人未だ航路
の事を聞かば下りしと通せしむるを凡百の事
行ふにざるの委あり嘉穀自ら熟慮して曰く公聞に
育くと雖ども一言するに志あり此上燈下の微見の
とありい天下に事行そし雖し故に今且賢徳聰明

公卿に謀を忽ち一才と挿んが為國は航路して外國
之情実と親親し彼の長短を洞察し然は海路以後に
方歸化の道と聞き遂に 神妙に威武を著く六合に
輝かしめんと欲するは嘉穀忠を 皇國に得る不
可の得也世事に在り何ぞ頼くは 朝廷は素志を深
索し速に允裁を賜ふ人事と世命 奏聞宜敷入に誠
照成慎後言

嘉穀

議定中

○京師より諸藩に手達書

近來大政治家の旧徳を出版し廣く天下に 所敷告に
遊の候い上下貴賤となく 所政道筋を致取せしめ一
意に方嚮するをを知りて其案理を踐行せしめんとの
清仁意にあらをいし付備國裁判諸道鎮撫使諸藩面々
居るに清政に相成り事い同大切に元計ひ遊邑遠隔
来くに至る不便極 所統旨貫徹極成度了相成り
事

但元幕府の所元初代元代官支取下は世及元係
に所付在の爲るに不致通達方任陣屋同等の如き
宿寄の爲る相違の事

二月

○腫病ある者の法一

申仙道楠川宍の史にくの事形をしとら世にハ御道筋
左右の回圃に青麦繁りて生長せ至成る日一隊の軍勢
いかめしく装ひて世所を通りたるに農夫の馬又亡走
打撲き急を有せしに米掛りて軍隊の史ハ駭然と思
ひ畑中の裏路を一さんにも走りしに密威の防あり
とて農氏もが誓古さしハ統の青圃へ去るに破の軍勢
伏兵らるとや思ひ人隊長去先も走り跡と見
むよ迎去しが固より敵の如くも是を退しに去る事

毛し為抄等九まとも何是く、ゆきしと其意の村童を
 も笑ひし其に腰痛の上へ今の世はもろくもと或人
 の借らししと是と腰痛も習たしはく勇士は其る者
 と見ゆ漢太三幽の以拓孝長とつふりのりや城中に居
 るししが俄か敵の攻寄る勢と聞や吾や此其かの
 き免よ一室に駈けし戸鎖をわし取し夜具打被り
 伏居多う合致す川津にしく稍く一面と出さくも昨日
 二の朝出く之極去りし次の日の戸口を出く我の消
 息と聞たりは取川は玉と乃ち自身柄を願ふく花と安
 圖ハしと九妙妻秋に思く多うさきハ腰痛ぬりともく一

生弱きもゆり糸を必き早怯者と侮る多うくは

○小栗仁右衛門屋書

秋本家小栗上野介去る正月申土着船く通るは付以
 以付二月廿八日知仍亦上御拜馬形権田系に出る土着
 在左の去去月廿九日官軍松平右京亮板倉重行殿松平
 藏丸凡人救之百人程上の倉室を繰出し尚月廿日上野
 介と共指回村に操入右人救く内室を以りの兵織し以
 て小栗上野介父子征伐致し中旨熱智岩倉殿下知く
 旨相達しと又大小砲共相後旨相達し以し付引渡し
 又一條の来る之日高橋に相致し中旨掛合に付同月

廿日同人七十時以同不仕族家致し同不あり同不
日常口舌出下中旨熱智より紅液以執以く則又一茶
以石連以家来之人く大小丸揚付同七日九つ時多時
町林以不仕下引連是白海白居是替く相付以へども
文以昂く節も多し牢庭安へ一日石連是以以付石越以
彦根右七人く内中間之人の相居下旨出役く者中達
し又一初め之人は斬首致し中間之人共吟味中入牢中
付以旨中液入牢致し以中間も形く多時所安園寺と中
寺以く官軍より出牢中液し則出牢致し以又付右く者
多時町に出以系権田村の者以出會上野介安吾承り以

不同人後先時六日朝日川中時以上の倉河系に於て文
以昂く節も多し上野介始め家来之人斬首致し以上以
て同人不持く諸道奥家来ども不持く衆とも積らば若
造り致し何方へか持裁以旨承り警き入る構より右の
者内走人存ゆり出府前書く始末中聞以同不允教世殿
涉屋中以上以上

閏四月十二日

小栗上野介留守致り

小栗仁右衛門

○

今月上旬に以會津家老仙基の先鋒軍門へ降伏附罷と

しうに石出の以付白石陣よりあつて會議にて及之旨は
達す之條に諸藩を及近之白石へ森會の坐仙甚より
中來り

○某が一の君灯月の初め苑多事の國々そのし
終ふよし承りて

古より流るる流波の山にわくまはるるをひ移を
形くさめりてあり

○

三月朔日會藩柏原源兵衛 天朝にの歎願參與衆應對
の始末并榊原清記歎願書才廿五号に出矣

